

草原がつなぐ人・自然・文化

# 全国草原再生ネットワーク

ニュースレター vol.37 (Jan. 2019)



茅金市場で保管されるカヤ（広島県北広島町／白川勝信氏提供）

## 新年のご挨拶

全国草原再生ネットワーク会長 高橋佳孝

明けましておめでとうございます。平素より全国草原再生ネットワークの活動にご理解とご協力をいただき、誠にありがとうございます。新しい年号の年を迎えるに当たり、謹んで新年のご挨拶を申し上げます。

昨年は、5月12日～14日に宮崎県において「第12回全国草原サミット・シンポジウム in 串間・川南」が開催され、全国から延べ900名もの参加者があり、盛大に執り行われました。初めて「湿原の保全」と「野生馬の放牧」という異色テーマを取り上げ、草原サミットの新しい方向性を探る大会となりました。

今回、シンポジウムの第四分科会「保全技術の伝承と安全対策」を当ネットワークが担当しました。「安全対策」が分科会のテーマになるのは、草原維持で欠かせない「火入れ」での事故が絶えないからです。2009年に大分県由布市で男女4人が、翌10年には静岡県自衛隊演習地で3の方が亡くなりました。その後も各地で火入れ事故が絶えず、一昨年には、山口県の秋吉台（美祢市）と兵庫県の砥峰（神河町）、熊本県の南阿蘇村と高森町でそれぞれ1の方が亡くなりました。そして昨年は、島根県の三瓶山（大田市）と北九州市の平尾台で延焼による火災が発生しています。

草原火入れはまさに一瞬たりとも気が抜けない作

業です。当ネットワークとしても、これまで安全性確保を繰り返し訴えてきました、注意喚起がマンネリ化しないよう、今後は何らかの知恵をしばり、工夫を凝らさなければならないと実感しています。また、各地の安全管理体制を紹介し、共有するのも当ネットワークの重要な役割でもあります。第10回から今回（12回）の全国草原サミットにおいても、「草原を次の世代に」を合い言葉に、火入れの安全強化や草原維持につながる農林畜産業の振興を掲げました。さらに、幅広く草原の重要性に関心を寄せてもらうため、「草原100選」の制定を関係機関に働きかけていくことを申し合わせました。この「草原100選」については、現在、関係機関と協議・調整を進め、選定作業に向けての具体的な作業に入っており、近々進捗状況をお知らせできると思います。

本年は、猪年です。たわわに実った果実が種子となり、エネルギーを蓄えて次の世代へと向かう準備をするという意味の年だそうです。サミット開催の中間年ということでもあり、まさに、新たな始まりに向けて新たなエネルギーを蓄える年（準備を行う期間）でもあります。直面する様々な課題の解決に向け、会員の皆様の一層のご理解とご協力が必要となりますが、引き続きご支援を賜りますようお願いを申し上げます。

## 各地からの報告

### 「茅採取」が国の選定保存技術に選定されました

(上野弥智代：一般社団法人日本茅葺き文化協会理事)

#### 「茅採取」国の選定保存技術に選定

2018年9月25日、「茅採取」が国の無形文化財のひとつである選定保存技術に選定されました。

「茅採取は、屋根葺の一種で農山村の民家に多く見られる茅葺に用いるための、ススキやヨシ等を育成し、採取する技術である。茅の採取は、本来は地域住民によって行われた農作業の一つであったが、建築資材としての需要減少、農業形態の変化により必要性が薄れた作業である。

茅刈り、乾燥させるための茅立て、選別して屋根葺材料に拵える茅選り、これら一連の作業を手際よく行う技術がなければ、屋根葺に用いる良質で大量の茅を得ることは不可能である。

茅の育成、茅場の管理も、地域の地勢や植物に関する知識や慣習の蓄積によって支えられてきたものである。質の確保のために火入れを行う場合にも、地勢や工程に関する知識や経験がなければ危険な作業である。

文化財建造物の修理において、茅が遠方から運ばれている実態があり、茅場制度の消滅に伴う担い手不足の問題があることから、保存の措置を講ずる必要がある。」(2018.7.20 文化庁報道発表資料より)として選定されたものです。

そして、日本茅葺き文化協会(1999年に発足した全国茅葺き民家保存活用ネットワーク協議会を母体に2010年に現組織に法人化)は、「地域色を尊重し、文化庁が設定している「ふるさと文化財の森」において、茅刈り、加工の研修、茅場の再生と活用等の



対話、茅採取の技術や文化についての記録作成といった事業を継続的に行っており、同技術の保存・伝承に尽力している。」(同資料)として、その保存団体に認定されました。

これは先人達の技、その知恵に学び、それを継承すべく、各地域の会員の皆さんをはじめ多くの方が継続的に共に取り組んできたことが評価されたものと喜んでいきます。それらを大切に繋ぎ、記録を継続するとともに、後継者や新しい担い手の育成に取り組んで参ります。その中で、茅場の維持管理や火入れ等については、全国草原再生ネットワークの皆さんとこれまで同様、またそれ以上に連携して進めることができれば心強く思っておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

#### 「伝統建築工匠の技」世界無形文化遺産へ

また、2018年3月、日本の伝統的木造建築技術は、「伝統建築工匠の技 木造建造物を受け継ぐための伝統技術」として、世界無形文化遺産に登録申請提案されました。

大工をはじめとする14職種の一つに、「茅葺」も含まれています。

「木・草・土などの自然素材を建築空間に生かす知恵、周期的な保存修理を見据えた材料の採取や再利用、健全な建築当初の部材とやむを得ず取り替える部材との調和や一体化を実現する高度な木工・屋根葺・左官・装飾・畳など、建築遺産とともに古代から途絶えることなく伝統を受け継ぎながら、工夫



を重ねて発展してきた伝統建築技術。」が世界遺産登録の内容であり、茅葺きはその最たる技術と言えます。また、この登録によって、世界の建築に関わる職人や専門家との技術の交流、対話が深められることが期待されています。

### 世界茅葺き会議日本大会を5月に開催

当会では、法人設立10周年を記念して、岐阜県白川村と共催で、来たる2019年5月に第10回茅葺きフォーラムを兼ねて、世界茅葺き会議第6回日本大会を開催します。

国際茅葺き協会(International Thatching Society -ITS)は、7カ国(イギリス、オランダ、ドイツ、デンマーク、スウェーデン、南アフリカ、日

本)で構成され、2年に1度持ち回りで世界会議を開催しており、日本は2013年に加盟して、第3回南アフリカ大会、第4回スウェーデン大会、第5回イギリス大会に参加して茅葺きの国際交流に取り組んできました。

それに続く第6回日本大会では、世界遺産合掌造り集落白川郷にて、世界の茅葺き職人150名が集まって、日本の茅葺き職人と技術の交流を図ります。この世界大会を日本で開催することで、茅葺きは世界の普遍的な技術、文化であることを理解し、これまで大事に培われてきた日本の茅葺き技術の伝承と、未来に引き継ぐ後継者育成につなげることで、茅葺き文化の再生をめざします。



2015年スウェーデン大会 見学会のようす



2017年イギリス大会 棟仕舞ワークショップ

### 世界茅葺き会議2019日本大会について

5月18日(土) 国際茅葺きフォーラム「世界の茅葺き これからの茅葺き」(同時通訳付)

会場：白川郷学園体育館(岐阜県大野郡白川村鳩谷614-1)

5月19日(日) 世界の茅葺き職人が合掌造りの屋根を葺く(結いの屋根葺きワークショップ)

場所：白川村内

5月20日(月)～22日(水) 見学およびワークショップ

場所：京都市内、京都府南丹市美山町、兵庫県神戸市

※国内参加者の募集は2月上旬を予定しています。(多数の希望者が予想されておりますので、開催地および当会会員優先で定員になり次第締め切ります。)

国際フォーラム参加者定員 450名(海外6カ国より150名、国内より300名)

## 石垣島北部における草原と馬事

(岩田光太：東京都在住)

この度、沖縄県石垣島を訪問する機会がありましたので北部の平久保崎周辺の様子について報告いたします。

石垣島は美しいサンゴ礁の海が特に有名で、石垣牛が数多く放牧されるなど畜産としても有名な観光地です。また、新たな空港がオープンし、日本全国からのアクセスが向上しています。

実際に現地をドライブすると、観光ガイド等に記載していないポイントとして、その名前が示す通り、平積みの石垣が多く残っていることがとても印象的でした。この点は特に観光資源として着目されていない状況で、放牧や野焼きが行われなくなって森林化が進んでいる野山とともに風化が惜しまれます。

残念ながら、石垣馬という在来馬は受け継がれておらず、島内には洋種ポニーや与那国馬といった小柄な馬が多数飼育されていました。乗馬施設は2018年10月時点で4か所程存在していました。この度お世話になったのは、平久保牧野にある石垣島馬広場です。

### 【テキサスゲート】

平久保崎の直前に接地されているテキサスゲート（現役）。テキサスゲートとは、常時路面開放型のゲートで車両の通行を妨げずに、有蹄類の通行を阻む構造物。当地のゲートは凹地にスチール製の簀子(すのこ)をかぶせるタイプでした。しかし、この簀子は内部が空洞となっており、大型車両の通行は想定されていないと考えられます。他の地域では、鉄道レール等で簀子がつくられていたりします。



### 【平久保牧場の採草地】

牛馬の放牧はなくなり、採草地として一部が草原として残っている。今は野焼きが行われていないとの

こと。採草地は牧草の種を播いている。



### 【平久保牧場から山当山を望む】

かつては山にも牛馬が入り草地化されていたとのこと。



### 【石垣1 平久保牧野】

所どころ平積みの石垣が台風にも耐えて残っている。嘗ては騎馬で牛の追込み作業も実施されていたとのこと。地図アプリケーション (Google Map) では円



形の構造物が確認できるが、地上（騎馬）からは木々に埋もれて構造物は確認できませんでした（藪にはハブが潜むので探索は危険を伴います）。

【石垣 2 平久保牧野】

雲と海と草原と石垣



【平久保牧野の小山に残っていた草原丘の名残】



【平久保牧野のテキサスゲート跡】

牛馬放牧が廃れ、役目を終えて土に埋もれたテキサスゲート。現役時代の構造は、平久保崎のものと同様と考えられます。



【平久保牧野東の海岸線に残る巨岩】

津波岩と呼ばれており、かつての大津波で山の巨岩が海岸まで引きずられてきたとのこと。サンゴや砂岩の中で、赤色が特徴的。島は幾度も地震による津波の被害を受けている。



【平久保牧野周辺のサトウキビ畑】

家畜への採草地以外の土地利用として、サトウキビ畑が主流となっていました。周囲は電気柵（パワーフェンス）で囲われており、イノシシ害対策とのこと。

【与那国馬のクータ】

石垣島馬広場のクータ（7歳）。与那国島生まれで、3年前の牧場開設で石垣島に移住してきた。小柄な馬は本来、ヒトが扱いやすいサイズである。顔のマスクはハエ除けです。



【久宇良地区の放牧地】

高台にカフェを併設する放牧地でした。黒い石垣牛の合間に点在する白点はサギのような白い鳥たち。



【石垣3 久宇良地区】

牧野の境界をL字に仕切っている、現役石垣。



【石垣4 久宇良地区】

石垣3の別ショット



## 三瓶のススキでほうきづくり

(和田譲二：NPO 法人緑と水の連絡会議)

島根県大田市の大田小学校 5 年生 3 クラス 80 名のみなさんとススキの穂でほうきを作りました。

5 年生の総合学習で「三瓶山の自然」をテーマに、宿泊研修や登山などを通じて、子どもたちは三瓶の動植物や生態系、草原の役割などを学んできました。11 月には西の原草原でそれぞれがススキの穂を刈り取って集めて帰りました。

筑波大学芸術系（農閑工芸）OP で卒業後ほんとはつくば市でほうき職人になったフクシマアズサさ

んを講師に招いて、小学校でほうきづくりのワークショップを開催しました。

自分たちが集めた草が自分たちの手で道具に生まれ変わっていく作業、子どもたちはみな楽しそうに取り組んでくれました。草原の見方が少し深まってくれるといいですね。

(ちなみに、ちょっと採穂の時期が早かったので、綿毛が飛ぶまで学校で乾燥してます)



## 広島県北広島町ではじまった「芸北茅プロジェクト」

(白川勝信：芸北 高原の自然館／ネットワーク理事)

広島県北広島町芸北地域では、毎年 11 月に 1 日だけ、茅を扱う「茅金市場」が開かれています。青果市場や魚市場のように、茅金市場では生産者が茅を出荷し、市場が必要な人に茅を販売しています。出荷された茅はその翌年のうちに、各地の現場に発送されていきます。

茅金市場に茅を持ち込んだときに、出荷者が受け取るのは「せどやま券」という地域通貨です。せどやま券は、芸北地域内の商店であれば、1 枚が 1,000 円として使うことができます。180cm 以上、直径 40cm の茅 1 束につき、せどやま券 1 束が発券されます。軽トラックの荷台一杯分の茅で、12 枚ほどのせどやま券がもらえます。2018 年の市場に個人で出荷した人は 7 人で、最も少なかった人は 3 枚、最も多かった人は 51 枚のせどやま券を受け取りました。

集まった茅は、主に北広島町内にある文化財等に使われています。2017 年には芸北地域にある国指定重要有形民俗文化財の古民家「清水庵」にも使われました。樽床ダムが作られるにあたって移築された当時には、当然のことですが地元の茅を使って屋根が葺かれていたはずですが、その修復にあたり、わずかでも地元の茅が使われたことは嬉しいことだと思います。

茅金市場には、地元で活動をしている NPO 法人西中国山地自然史研究会も茅を出荷しています。茅を刈っているのは芸北地域の千町原という草原です。千町原は草刈り場から陸軍演習地として接收された歴史を経て、放牧場として開拓され、1980 年代までは草原として管理・利用されていました。放牧をやめるとカラコギカエデやノイバラなどの低木が生育しはじめたため、西中国山地自然史研究会は

2004 年から生物の保全を目的に、千町原で草原の保全活動をはじめました。活動当初は低木の伐採から始まり、2010 年頃には火入れをするなど、場所や方法を変えながら試行錯誤を続けてきました。近年はオオハンゴンソウの駆除作業が熱心なボランティアによって行われています。

茅金市場が始まった年からは、秋の作業を「茅の収穫」に切り替えました。それまでの「草原の保全」という目標に対して、活動の目的が明確になったと感じています。ススキ原の再生を念頭に、春は低木の伐採、夏は外来種駆除を行い、秋の活動では茅の採取をしています。さらに、茅金市場で受け取ったせどやま券は、活動時の飲み物やお菓子代に使っています。

このように茅金市場ができたことで、芸北地域のススキ草原は（ささやかながら）経済活動と結びつくようになりました。また、ゴールの姿が見えにくかった野生生物の保全活動にも、方向性が見えてきました。集められた茅が使われることで、茅葺き建築そのものに加え、茅刈り、屋根葺きといった地域の文化を継承することにも貢献しています。

茅金市場にはもうひとつユニークな点があります。それは、市場での茅の受け入れが芸北中学校の授業として実施されていることです。生徒達は、地元のケーブルテレビで市場開場の告知をしたり、事前に茅を刈る体験をしたりして、市場の当日に持ち込まれた茅束の検品や地域通貨の発券をします。そして中学校 3 年生になると、修学旅行の際に給料袋に入れられたお小遣いが校長先生から一人一人に配られます。その中身は、自分たちが集めた茅を販売することで得られた収益です。その他にも、茅の収益は



茅金市場への茅の受け入れと検品



せどやま券の発券

ウォーターサーバーなど学校の備品購入に使われます。刈り取り体験から検品や発券までをすることで、生産の場である一次産業と、流通という三次産業について実際に学んでいます。「茅金市場」という名前も、生徒たち自らが付けたものです。

このように、茅金市場は芸北地域の貨幣経済、野生生物の保全、文化の継承、教育活動と、様々な分野にわたって良い影響を及ぼしています。こうした取り組みが実現できたのは、もちろん中学生のアイデアだけではなく、茅の保管所だけでなく、最終的な茅の利用の場までが整ってはじめて、流通は成り立ちます。教育目標を設定して授業計画を立てた学校、茅刈りや茅の管理を担う PTA、地域通貨

を管理する NPO 法人西中国山地自然史研究会、保管場所を整備して提供する教育委員会、そして茅を現場で使う茅葺き職人と、多くの関係者が協議して全体の枠組みを作ったからこそ茅プロジェクトは進みました。そして教育委員会は文化財等に茅を使う顧客としての立場でも重要な役割を果たしています。

芸北での茅生産はわずかな量ではありますが、現代版の「結い」とも言える小さなしくみが見えてきたように思います。茅の収量増加や品質向上など、クリアすべき課題はありますが、活動の中心となっている PTA の意気込みには心強いものがあり、今後が楽しみです。



茅金市場の茅保管状況



せどやま券を受け取った地域の人

## 全国草原リレー（第17回）

ネットワークの会員を中心に、持ち回りで各地の草原を紹介するのが「草原リレー」です。第17回

は、理事でもある霧ヶ峰ネットワークの荒尾氏に、阿蘇での最近の取り組みについて紹介して頂きます。

### 草原からの恵み「お酒」

（荒尾章子★私は辛口「本金」派：霧ヶ峰ネットワーク／ネットワーク理事）

冬、霧ヶ峰の草原は、雪に閉ざされ、夏のにぎやかさとは別に、静かでゆったりとした風景が広がります。雪に覆われるからこそ、わかるゆるやかな地形を楽しむことができます。

そして、この風景とは別に、もう一つ、麓で楽しめるもの、冬にうってつけのものがあります。それは、「お酒」。諏訪地域（岡谷市、下諏訪町、諏訪市、茅野市、原村、富士見町）は、9つの酒蔵（長野県酒造組合ホームページより）があります。そしていわずもがな、これらの酒蔵を支えているのは、霧ヶ峰をはじめとして周辺の山々からもたらされる豊かな「水」です。霧ヶ峰の地下水は、場所によってさまざまな水質を示す（宮原・木下、2014、信州大学環境科学年報 36号）ようですが、私が毎年夏の間1か月ほど滞在している間に使用していた水は、まさに硬水でした。手を洗うとしっかりとペールに包まれているような温かさがありました。

ところで、霧ヶ峰からもたらされる多様な水質の影響でしょうか、諏訪地域は酒蔵多いだけでなく、銘柄も豊富です。その中でも私の一番を・・・と言いたいところですが、せっかくですので、「霧ヶ峰」の名を冠する麗人酒造株式会社（諏訪市）の焼酎をご紹介します。一つは、「霧ヶ峰オールド」で、夏のニッコウキスゲの咲く様子が描かれたラベルが貼られています。味をご紹介しますところですが、少しお高めの値段で、残念ながら賞味したことはありません。紹介では、



上下写真とも：  
麗人酒造（株）HPより



冬の霧ヶ峰の風景

「米焼酎を榎樽に五年間以上貯蔵熟成しました。樽熟成ならではの風味をお楽しみください。」とあります。そして、もう一つ、私にも手に届く「霧ヶ峰」は初夏に咲き乱れるレンゲツツジが描かれたラベルで、「信州・霧ヶ峰高原の清冽な伏流水を使って仕込んだ」とHPにあるように、うっかりのみすぎてしまうようなすっきりした味わいです。

「霧ヶ峰」以外にも、全国区の「真澄」から、地元で愛される「本金」まで、諏訪地域には多様なお酒があります。毎年、春と秋に諏訪五蔵ののみ歩きイベントがあります。ぜひ、諏訪を訪れ、「水」（お酒？）から霧ヶ峰を体感してみませんか？



のみ歩きのにぎわい（諏訪五蔵 HP より）

## 草原をめぐる動き (2019年1月～2019年4月)

- 1/5 観察交流会 (場所: 山梨県山梨市牧丘町乙女高原、連絡先: 乙女高原ファンクラブ)
- 1/12 野焼き支援ボランティア初心者研修 (第1回) (場所: 熊本県阿蘇市 阿蘇草原保全センター「草原学習館」、連絡先: 公益法人阿蘇グリーンストック) 1/20、2/2、2/6 に第2～4回あり
- 1/14, 27 阿蘇野焼き支援活動入門セミナー2019 in 福岡 (場所: 福岡県福岡市 アクロス福岡、連絡先: 公益法人阿蘇グリーンストック)
- 1/16 田島ヶ原サクラソウ自生地の草焼き (場所: 埼玉県さいたま市桜区 桜草公園内「田島ヶ原サクラソウ自生地」、連絡先: さいたま市教育委員会文化財保護課)
- 1/26 流域連携活動「小貝川の野焼き」(場所: 茨城県常総市小貝川河川敷、連絡先: 森林塾青水)
- 1/26 若草山山焼き (場所: 奈良県奈良市奈良公園内 若草山一帯、連絡先: 奈良市観光センター)
- 1/26 本州最南端の火祭り (場所: 和歌山県東牟婁郡 串本町潮岬望楼の芝、連絡先: 串本町観光協会)
- 1/27 流域連携活動「菅生沼の野焼き」(場所: 茨城県坂東市菅生沼、連絡先: 森林塾青水)
- 1/27 都井岬の野焼き (場所: 宮崎市串間市都井岬、連絡先: 都井岬ビジターセンター)
- 2/2 観察交流会 (場所: 山梨県山梨市牧丘町乙女高原、連絡先: 乙女高原ファンクラブ)
- 2/2 茅刈り&草原の生きもの観察 (場所: 兵庫県三木市 三木山森林公園、連絡先: 三木山森林公園管理事務所)
- 2/3 川内峠野焼き (場所: 長崎県平戸市川内峠、連絡先: 平戸市観光課)
- 2/10 大室山山焼き (場所: 静岡県伊東市大室山、連絡先: 大室山リフト)
- 2/17 乙女高原フォーラム～コケの世界へようこそ～ (場所: 山梨県山梨市 山梨市民会館、連絡先: 乙女高原ファンクラブ)
- 2/17 秋吉台山焼き (場所: 山口県美祢市秋吉台、連絡先: 秋吉台山焼き対策協議会 (美祢市農林課))
- 2/22 かやぶきシンポジウム 2019 (場所: 広島県広島市中区 アステールプラザ、連絡先: 一般社団法人古民家再生協会広島)
- 2月下旬 平尾台野焼き (場所: 福岡県北九州市平尾台、連絡先: 平尾台自然の郷)
- 3/2 ヨシ焼き (場所: 山口県山口市阿知須きらら浜 自然観察公園、連絡先: きらら浜自然観察公園)
- 3/9-10 キャンドルナイト・雪原トレッキング (場所: 群馬県みなかみ町、連絡先: 森林塾青水)
- 3/10 生石高原山焼き (場所: 和歌山県有田郡有田川町・紀美野町、連絡先: 紀美野町役場産業課)
- 3/10 追加の山焼き (草刈り・火入れ) (場所: 山口県美祢市秋吉台、連絡先: 秋吉台草原ふれあいプロジェクト事務局)
- 3/16 渡良瀬遊水地ヨシ焼き (場所: 渡良瀬遊水池、連絡先: 渡良瀬遊水地ヨシ焼き連絡会)
- 3月中旬 飯田高原野焼き (場所: 大分県玖珠郡九重町、連絡先: 飯田高原野焼き実行委員会)
- 3/26 三瓶山西の原火入れ (場所: 島根県大田市三瓶山、連絡先: 大田市役所)
- 4/13 雲月山の山焼き (場所: 広島県北広島町 連絡先: 西中国山地自然史研究会)
- 4月上旬 塩塚高原野焼き (場所: 愛媛県四国中央市・徳島県三好市、連絡先: 四国中央市観光協会・三好市役所)
- 4月上旬 扇山火まつり (場所: 大分県別府市扇山、連絡先: 別府八湯まつり実行委員会)
- ※上記以外の情報もホームページで随時公開しています。

### 全国草原再生ネットワーク ニュースレター vol. 37 2019年1月号

全国草原再生ネットワーク事務局

〒694-0064 島根県大田市大田町大田イ 376-1

NPO 法人緑と水の連絡会議内 Tel. 0854-82-2727 Fax. 0854-84-0262

【編集後記】新年あけましておめでとうございます。昨年は「第12回全国草原サミット・シンポジウム in 串間・川南 (宮崎) 大会」が開催され、草原のすばらしさを再認識する機会になったと思います。本年は、冒頭の会長のあいさつにもありましたが、草原サミットでもうたわれた「草原100選」を進めて行く年になりそうです。東伊豆で予定されている第13回草原サミット・シンポジウムも動き出すと思います。本年も引き続き、よろしくお願いたします。